

市川大門地区・大門碑林拓本の書研究教材への活用と 伝統工芸品の全国的PRプロジェクト

古 木 誠 彦

九州女子大学人間科学部人間基礎学専攻、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2013年11月1日受付、2013年12月19日受理)

はじめに

本プロジェクトは、九州女子大学特別研究事業「平成24年度 総合的な地域活性化事業 支援(1) 地域における社会貢献事業支援(ものづくり・子育て等)」の採択により実施されたものであり、本稿はその報告と25年度における継続プロジェクトの一端を報告するものである。

現在までどの研究機関も書道教材として活用しなかった市川大門碑林公園の石碑群を、市川三郷町との共同企画でその活用方針・方法を検討し、実際に拓本取りした石碑の拓本を教育現場(参画した九州女子大学学生が教育実習等で使用)や研究機関(九州女子大学)での活用を可能とした点において、本プロジェクトは画期的なものであり、しかも市川大門町としても、碑林公園設立後、初の試みである。

1. プロジェクトの目的

山梨県市川三郷町にある大門碑林公園内の石碑群は、中国で最も著名な陝西省西安碑林と山東省曲阜碑林の名碑の模刻でありながら精緻であり、その完成度は、世界的にみても比類ない。これらの碑群は、中国陝西省碑林博物館の監修・制作であり、完成度の高さ故に、その拓本は実物の拓とされる恐れもあるということである。そのような碑林公園を、町は国内に多くいる書道愛好者の観光地と位置付け活用してきた。

しかし、観光地化された大門碑林公園ではあるが、その専門的価値と反し、町の活用において特段の政策もなく、町の管理運営から手が放れ、全てを民間企業に委託して維持管理されているのが現状である(平成24年度)。

大門碑林の石碑群の日本国内における周知度は、書道専門家を中心として高い。また、書道愛好者にも知られるところであり、上記の石碑制作過程も合わせ考えると申し分ない研究対象である。

世界的に見ても価値ある石碑を書道教材として活用しながら、本学書道コースのPRと市川三郷町を九州地区でPR(町興し)することが本プログラムの目的である。

市川三郷町は、昔から無形文化財である甲州和紙、また隣接町雨畑地区は日本有数の硯である雨畑硯の産地でもある。このような環境から、本学書道専修コース(書道ゼミ)の学生

が、日本に居ながら多くの書に関する実地体験ができるシステム（教材作成を含む）の確立も目指す。

2. プロジェクト内容（概要）

このプロジェクトを実施するにあたり、平成22年より、協力部署の市川三郷町総務課広聴広報係・係長の一瀬浩氏を通じて、碑林公園石碑の研究教材としての開放・活用を市川三郷町長に対し、粘り強く陳情してきた。その結果、条件付きではあるが、町側がその利用を許可する方向に向かった（許可の可能性が出たのが平成24年1月時点、本研究自体は24年度4月実施スタート）。

市川三郷町の、本学における授業（書道科目）目的に対する理解と町側の町興し事業趣旨の合致が、このような結果となったことは間違いない。

市川三郷町協力のもと、学生自身による拓本取りの実践を主たる研修とし、必要最低日数を含む作業工程の検証、拓本専門家の講習会等も含む「現地実習プログラム」を検討し企画した。これは、碑面の保護を視野に入れたもので、市川三郷町が、拓本取りの専門家ではない研究代表者や共同研究者ならびに学生の石碑に対する知識教養を確認し、拓本の採取を最終的に許可するためのプログラムであった。

また、和紙に関する研修も計画した。学生レベルでの和紙制作の可能性を検証（様々な形体・漉きの技術を実習）し、学生の書に関する意識と自学意識の向上を促す。

上記のことを総合し、自学意識の啓発の一例としては、自ら取った拓本を卒業後も所有し、それを教育現場で活用（拓本のデジタル化）させる。単なる表面的説明を主とする授業ではなく、経験値により実践的な活きた授業実践が想定できる。検討・研修を行った内容については、成果発表展示を行い、本学書道のPRと市川三郷町の文化PRを並行して行う。

現在まで、全国でこのようなイベントは皆無、初の試みとなる。ある程度の成果が認められたならば、本プロジェクトを基盤に、書道コースを有する大学と新共同プロジェクトを立ち上げ、平成25年度山梨県主催「国民文化祭」において、市川大門碑林を中心に全国規模の書に関する交流会を行いたい。その牽引を本学が行う。平成24・25年度において、まさに好機プロジェクトといえる。内容とその成果拡充のため、2年間の実施が望ましいと考える。さらに25年度は、新人間科学部の完成年度でもあることから、このプロジェクトは、内容・タイミング共に申し分ないと考える。（この「プロジェクト内容」は、平成23年度末より平成24年度当初における、市川三郷町側との協議を反映させている。）

3. 成果の地域へもたらす効果

市川三郷町で現窓口対応を行っている、総務課広聴広報係広報係長 一瀬浩氏の、「大門碑林公園は、大きな転換期を迎えている。開園以来、政治的背景を基に紆余曲折を乗り越えて

きたが、所謂瀕死の状態である。漸く現町長になって活性化に着手しようと意を決し独自にプロジェクトチームを立ち上げた矢先に、九州女子大学からの打診を受けた。このタイミングと縁こそがまさに活性化の後押しと思い、共に手を携えて前へ進みたい。貴学の力をバックボーンとして九州地方への知名度アップと、入場者減への歯止めをかけたコラボプロジェクトに賭けてみたい。」との意見から、この企画に賛同と絶大なる協力を得た。

また、市川三郷町は和紙や印章の生産地でもあり「書道日本一のまちづくり」を旗印に全国書道展も実施しているが、参加者数は横ばいの状況（北海道から九州まで参加者あり）である。参加者率を向上させていくためにも、書を志す多くの大学生らと関わりを持てることで、平成25年度に実施予定の「国民文化祭」（書部門）への町民の参加意識やホスピタリティの向上も期待できるなど、その波及効果は多岐にわたる。そのためにも「単年度実施の研究でなく、できる限り長いスパンで取り組めることを切に希望したい」と、町側の要望であった。

また、市川三郷町との本プロジェクト実施にあたり、以下の観点でこのプロジェクト効果の具体例を、町側と確認した。

<効果の具体例>

- ① 拓本取りに適した和紙の研究・生産が実現可能になる。
- ② 既に高齢化した拓本取りボランティアに対する新メンバーの参画、及び後継者の育成が見込まれる。
- ③ 地元の高校生や町民を取り込んだ書道文化の発信及びPRが実現可能になる。
- ④ 石碑保護と開時の両面を考慮しながら、優先順位（高校書道教育現場での生徒に対する実地の必要性、並びに大学教育における書道教育の質的向上）を付して現碑の一般公開（アクリルカバーなし）の実現ができる。
- ⑤ 学生が将来的に教育者となり、多くの生徒にその経験値を伝達することで、次世代へと続くPR活動が期待できる。

以上のことから、本プロジェクトは、市川三郷町と九州女子大学にとって想像以上の波及効果をもたらすと考えられる。

4. プロジェクト組織

本プログラムは、以下のような組織で実施した。

プログラム責任者：古木 誠彦 准教授（九州女子大学）

共同研究者：鄭 俊如 教授（九州女子大学）

参加協力者：宮本 和典 准教授（九州女子大学）

プログラム受入協力先：山梨県市川三郷町

協力先担当者 町長：久保 眞一 氏

統括：新津 敏信 氏

政策推進室長：長田 勝則 氏

総務課広報係広報係長：一瀬 浩 氏

生涯学習課生涯学習係主任：笠井 悟 氏

他、協力者： 大木 稔章氏（ホテルニューオオギ 専務取締役）

伊藤 滋氏（拓本研究家・木鶏堂）

株式会社 二光（市川大門碑林公園管理会社）

峯硯堂（雨畑硯）

印章資料館（六郷印章業連合組合）

プロジェクト参加学生：人間基礎学専攻 国語・書道コース＜古木ゼミ＞

10B4008 小川 結意

10B4011 亀井 寿子

10B4013 河野 夏美

10B4030 陣内 仁美

10B4062 毛利 奈津子

10B4063 森永 祐美

5. 市川三郷町の成立と特徴

市川三郷町は、平成 17 年 10 月に旧三珠町・市川大門町・六郷町が合併して誕生した。

甲府盆地の南西に位置し、南アルプスを源流とする釜無川と、秩父山系を源流とする笛吹川が合流し富士川となる左岸に位置している。四季折々の自然が楽しめる四尾連湖や芦川溪谷、歌舞伎文化公園、ぼたん回廊や桜の名所、花火、和紙、はんこなどの地場産業、大塚人参やとうもろこしの「甘々娘」に代表される農産物、市川の百祭りなど、町には誇れる資源が数々あり、地域活性化事業等も近年活発になってきている。

また、長引く日本経済の停滞など大変厳しい状況のなかで、町長を中心に財政健全に向けて懸命に取り組み、着実に成果を挙げている状況である。

現在の市川三郷町は、「やすらぎづくり、日本一の暮らしやすさを目指して」を基本方針に掲げている。（町民憲章＜平成 19 年 4 月 1 日制定＞、人口・世帯数の推移については、市川

三郷町 HP に詳細あり)

6. プロジェクト実施計画・日程等

本プロジェクトは、当初、2年間の実施を目指していた。しかし、研究内容の精査と次年度の研究費確保の有無から再考し、以下の実施内容で遂行した。

【24年度】

4月～5月 …4月上旬・本プログラムの双方による確認。適宜、市川三郷町と打合せ実施。

7月 …拓本取りと和紙制作に関する具体的最終検討・現地視察。

8月 …拓本取りの指導と石碑（書体・字形・用法など）に関する研究（学生が主）、和紙に関する講習・研究会

9月 …拓本取り・印章資料館見学・和紙作りの実施（現地実習5日間を予定）

11月～1月 …拓本・制作和紙の展示検討準備。市川三郷町と展示PR検討
拓本のデジタル教材化検討（大学生向け・高校生向け）

2月(or3月) …美術館にて成果発表展示（デジタル教材の試行を含む）

※この展示発表に関しては、本研究参加学生の卒業書作展（平成26年）
に実施予定に変更した。

【25年度】

10月 …「第28回 国民文化祭やまなし in 市川三郷町」（市川三郷町）

平成26年1月…「第46回 九州女子大学 卒業書作展」（九州国立博物館）

上記、平成24年度の計画では和紙の制作を企画していたが、9月の現地実習の際には、急遽中止を決定した。前日までの拓本取り（以下、採拓）の作業が、天候の影響により予定通り進まず、本プロジェクトの根幹をなす採拓を中途半端で終了することは考えられなかったため、敢えて採拓を終日2日間とした。そのため、紙に関する研修は、講義のみによる研修に留めた。

平成24年度の7月・8月・9月の現地日程は、以下の通り実施した。

【7月】事前調査（最終検討・現地視察）〈古木が単独で実施〉

25日（水）…移動日（福岡～市川三郷町）

16時より、町長以下の協力担当者との打合せ。

26日（木）…町内視察。碑林公園において石碑や採拓方法・条件の打合せ。

【8月】第一次現地調査〈古木・鄭・学生で実施〉

7日（火）…移動日（福岡～市川三郷町）

8日（水）…09:00 碑林到着（ホテルのバス）

09:20 碑林公園全体の視察・石碑の確認
 09:50 伊藤滋氏による拓本についての講話・実技講習
 13:00 昼食
 14:00 伊藤滋氏との最終打合わせ
 14:30 拓本取り練習
 15:30 石碑（玄秘塔碑）を実際に使用し拓本取りの練習
 18:00 終了

9日（木）…午前中 採拓方法の再検討 市川三郷町内の視察
 午後 移動（福岡へ）

【9月】第二次現地調査〈古木・宮本・学生で実施〉

8日（土）…移動日（市川三郷町へ）
 9日（日）…採拓（終日・準備等を含む）8:30～18:30
 10日（月）…採拓（終日・片づけ含む）8:30～19:00
 11日（火）…（午前）硯制作体験 9:00～12:00
 （午後）篆刻関係の見学 13:00～16:00
 町長への表敬訪問 16:00～

12日（水）…移動日（福岡へ）

【10月】拓本整理・デジタル化への試行

10月以降（24年度内）において、各人が採拓した拓本を再度精査して画像データを作り、教材への転換を試みた。個人によってその活用目的は様々で、「単なる法帖としての活用」、「数種の拓本との比較本としての活用」が主である。

7. プロジェクト実施方法・内容

7.1 プログラム①

プロジェクト参加者（各研究者・学生）が、まず市川大門碑林公園についてその設立の経緯を知り、建碑された意義を確認した。

第一次現地調査の実施研修当日は、石碑を観察してその状態を目検し、各石碑の実測データを収集した。

実際の採拓においては、碑面保護の観点からこちらが採拓要望した石碑について町側と事前検討し、碑林公園内にある15種類の石碑中7碑について許可を得、採拓実施の許可を得た。石碑名は以下である。

- A, 九成宮禮泉銘（担当：陣内）
- B, 孔子廟堂碑（担当：毛利）
- C, 集王聖教序（担当：河野）

D, 雁塔聖教序 (担当: 亀井)

E, 顔氏家廟碑 (担当: 小川)

F, 曹全碑 (担当: 森永)

G, 高貞碑 (担当: 古木)

先ずは、これらの碑を各担当者が、石碑に関する基礎データの収集から調査を始めた。

担当する石碑の拓本に関して、世界に現存する拓本（公的に認められている拓本）の種類に言及し、それぞれの特徴を調べた。特徴の確定に関しては、所蔵者の経緯や拓本の採拓時期の想定、拓本中の字形に関する詳細な観察を主として、字形の欠けの状態を記録し、大門碑林拓との相違について、研究できるようデータの作成を行った。

7. 2 プログラム②

第一次現地調査の研修では、市川三郷町からの教育的指示・命令により、研究代表者（古木）に対して伊藤滋氏による研究内容と拓本に関する知識全般に亘るヒアリング、プログラム参加者全員に対する講習会を実施した（実施場所は、市川三郷町「源氏の里」）。

このヒアリングと講習会によって、町側が研究実施の最終的可否を、実質判断するものであった。

内容は、先ず、研究代表者（古木）から本研究プログラムに関する経緯説明とその目的意義の説明を行った。さらに、本プログラムの将来的展望について言及し、その波及効果についても伊藤氏へ説明した。[波及効果に関しては、町側との事前ミーティング（7月）において、協議済み]

その上で、伊藤氏から意見を聞き、現存する中国書道史上の石碑拓本に関する基本的知識の修正と新研究分野の想定と視点について、全員がレクチャーを受けた。

次段階として、採拓に関する知識・技術の再確認と研究視点の明確化について助言を受けた。

採拓の知識に関しては、一般的な湿拓法と乾拓法の技法を再確認し、現状（イレギュラーな場面も想定）にあった採拓方法を検討することが、伊藤氏より提案された。現状とは、単なる石碑の状態だけを指すのではなく、採拓時の気象状況を含めた採拓技術を指す。

打包[タンポ]製作に関しても、碑面と現地の自然環境を熟考し、研究者と研究協力者・学生とで改良を重ねた。

7. 3 プログラム③

現地採拓を行う以前に、7月から8月の二ヶ月程をかけて、大学構内で対象物を変えながら採拓練習を行った。

練習については、半紙版の練習用石碑（石碑レプリカ＜教育図書＞）・瓦当・コインなどを

用いた。細部に亘る採拓をより確実にするため、採拓対象物を段階的に小さなものにして練習を行った。(伊藤氏助言による)。この練習によって、採拓対象物に採拓紙を乗せてタンポを打つ際の力加減(陰刻又は陽刻での違い)の確認と、採拓時の紙の状態と墨の関係(墨濃度やタンポに含ませる墨量)の確認・検証を行った。

このことで、以下の問題が表面化した。

- 1、採拓時における石碑レプリカ採拓面の破損(現地碑面の材質に対する疑問)
- 2、墨の濃度問題(タンポに使用する布の質と墨の関係)
- 3、紙の種類・性質に関する問題

実際(9月)の採拓では、各人が担当石碑の状態と天候を見ながら採拓を続けた。

1日では、各人納得できる採拓ができない状態であったため、急遽、採拓を2日間とした。(採拓しながら諸問題が露見した。)

7. 4 プログラム④

雨畑硯製作(現地特別研修)を行うため、大学において事前に雨畑硯に関する歴史的事項や現状について研修を行った。

プロジェクト参加学生は、雨畑硯に関する知識がなく、かえって一からの研修が行えた。

この雨畑硯製作研修を前に、実習先の決定が一転した。問題は、硯製作初心者に対して、「どの程度の指導ができるのか」「個人技術と製作時間の問題」など、硯職人との折り合いを決めなければならず、大変苦慮した。

その苦慮する最大の要因は、拓本取りの状況に応じて、研修日程を流動的に計画している面にあった。本研究プロジェクトは、採拓を主として組まれている。よって、現地の気候状況と我々の採拓進行状態によっては、採拓日程を延長もしくは断念する事態も想定できる。故に、研修当日にならなければ硯製作が実施可能か分からない面もあり、受け入れる工房にとっては、自らの計画も立てにくいためである。

研究協力者・一瀬浩氏(三郷町広報課課長)の尽力により、富士川沿いにある峯硯堂に研修先が決定した。

硯製作には、半日を要した。職人に予め原石の選別を依頼。雨畑石(ある程度、硯の概形に加工した原石)の表面に、硯面製作位置を浅く線引きしてもらい、それを目安にして、指導を受けながら各人が硯の「池」部と「丘」部を彫り進めた。磨きに関しては職人業であるため、最終段階の製作を含め職人に依頼した。

7. 5 プログラム⑤

市川三郷町六郷は、水晶が産出されるようになった文久年間（1861～1863）に水晶印の篆刻が始まったといわれ、現在では印章生産量が全国一を誇る産地となっている。

時代の経緯から、現在は水晶加工業が盛んであり、市川三郷町地場産業会館が設立され、その中に印章資料館が置かれるようになった。

印章資料館展示の目玉は、現在周知されているように『十鐘山房印挙』（捺印原本）である。

この『十鐘山房印挙』は、もともと故・小林斗盦（文化功労者・日本芸術院会員）氏所蔵であったが、町が印章産業振興を将来へ図っていく支柱にするべく交渉し、譲渡されたものである。

この『十鐘山房印挙』は世界的にみても貴重なものであり、しかも捺印された原本を実見できる機会は海外においても皆無である。そのため、この場所で、このような印譜を実見できることは、貴重な体験となる。プログラム参加学生の、篆刻に関する研究範囲の拡充をねらい、印章資料館視察を計画した。また、当館には小林斗盦氏の自作印とその印譜10点も展示され、現代篆刻家最高水準の技術も鑑賞できることは、無上の研修になると推測する。

7. 6 プログラム⑥

市川大門町は、和紙の産地でも名高いが、近年は、その生産量が減少しているという。和紙製作体験を計画するにあたり、いろいろと考えた。

プログラム内容の多さゆえ、時間的にある程度融通のきく研修場所を設定した。（本来ならば、町無形文化財指定の工房を視察するべきであったが、拓本取りの状況によって日程が前後する可能性が考えられたため。）

甲斐岩間駅がある身延町は、「身延町なかとみ和紙の里」という施設があり、紙に関する総合的な体験・研修が行える。ここを研修場所に設定した。（実際には、前述のように拓本取りの日程が延びてしまい、紙体験研修は行わず。）

7. 7 プログラム⑦

各自が採拓した拓本を画像データ化し、書道の臨書教材としてのテキスト作成を行った。

これには、当然のことながら膨大な時間がかかり、個人によっては、市川大門の拓本（以後「市川大門本」と名称）だけで、テキスト作成をする者もいれば、現存する拓本と市川大門本とを併載してテキスト作成をする者もいた。

7. 8 プログラム⑧

平成26年1月1日から5日までの期間、九州国立博物館・研修室において、本プログラムの発表を行った。スライドを使い、市川大門碑林の紹介と採拓時の状況報告を行った（展

示会場内にて)。

また、我々が採った拓本の他に、市川大門碑林公園から拓本を借り出し、合わせて展示・説明（学生が主体的に）を行った。鑑賞者に各拓本の説明を行うことで、拓本に関する知識の更なる定着がなされたと感じた。自作の硯（雨畑硯）も、合わせて展示した。

展示拓本は、以下の通り。

- 曹全碑 (森永拓)
- 孔子廟堂碑 (毛利拓)
- 集字聖教序 (河野拓)
- 顔氏家廟碑 (小川拓)
- 九成宮醴泉銘 (陣内拓)
- 雁塔聖教序 (亀井拓)
- 禮器碑 (大門碑林本)
- 張猛龍碑 (大門碑林本)
- 雁塔聖教記碑 (大門碑林本)
- 皇甫誕碑 (大門碑林本)
- 大唐宗聖觀記碑 (大門碑林本)

8. 本プロジェクトの効果

何といっても、一地区の滞在で、書道に関するある程度の体験や実見検証ができることが、第一に挙げられよう。

さらに、今回のプロジェクトでは、現地の碑林公園において拓本研究の第一人者である伊藤滋氏の講話ならびに研修を受けられたことも、プログラム実施者全員にとって最大の利益であった（氏より新資料の提供あり）。

碑林公園に関しては、特別に伊藤氏の参画を得られたが、硯・紙・篆刻（石材）に関しては、それぞれの専門家（職人）が地元在住のため、伝統という立場による講話や現状の様子を詳細に聞くことができる。書に関わる学生や研究者がこれらの伝統工芸に対して仮に疑問を持った場合に、目前にある現物を例に挙げ、即座に解答と理解の深化が得られる。知識の定着には欠かせない実見検証と制作作業の両立によって、本プログラムは書道芸術に対する理解の充実に寄与でき、その効果は多大であると確信できた。

今回は、九州女子大学と市川三郷町の企画ではあったが、ここに近隣大学との共同研究を組み込めば、より大きな活動となり、「九州女子大学の書道」というブランドのPRと充実を更に行えるであろう。

今回のプロジェクトに関しては、山梨日日新聞の取材を受けた（2012年10月11日木曜日付紙面にて紹介される）。

何よりも、参加学生の書に対する意識改革においては想像以上の効果があった。

9. 本プロジェクトの問題点

本プロジェクトは、我われ関係者に言及すれば、今後の大門碑林公園の活用方法の模索に大いに役立ったと考える。

しかしながら、以下の点において、難点や再考の余地があると考えた。

- ①碑面の強度問題
- ②現地における採拓時間（時間帯）に関する問題
- ③紙または硯製作前の指導・基礎練習に関する問題
- ④ホスピタリティの現状
- ⑤研修場所への移動手段（現地内移動も含む）

①に関しては、実際に採拓を行い、想像以上に碑面が柔らかいことが新たに判った。また、刻跡をはっきり見せるために、表面に墨（もしくは顔彩のようなもの）を塗布しているため、採拓時の糊が強すぎるとそれが剥がれてしまう。採拓は、極力、糊を弱くして実行した。（糊の粘度のため表面が少し剥がれてしまい、市川三郷町役場の観光課と広報課の代表者と、現地碑林公園で急遽ミーティングを行い、採拓続行または中止の協議を行った。碑面の状態を見、糊の粘度について町の代表者から指示を受け、その指示を厳守することで採拓続行となった。）

②に関しては、①との関連で、採拓時の糊を弱くしたため、微風でも採拓紙が飛んでしまった。市川三郷町は甲府盆地内に位置するため、夏期は異常に気温が上昇する。しかしながら、碑林公園は山間に位置するため、無風の時はいいが、風が出ると山伝いに風が吹く。その時間帯が読めなかったため、採拓に苦勞をした。

③に関しては、練習であるとしても、製作に際し道具が必要となる。その費用や設置場所の検討を行わなければならない。また、仮に準備できたとしても、練習するに当って専門家が大学近隣にいないためビデオ教材による練習になる。どの程度までの練習が必要か、その検証も重要であると感じた。

④では、まず現地宿泊所が町内に1軒しかないことである。町の県外向けのイベント等（特に、市川大門の花火大会は、全国的に有名）で県外からの観光客が多い時には、宿泊場所の確保に苦慮することは安に想定できる。

二つ目は、農業が町の中心産業であり、到る所に畑が多くて土地が広いため、目的地へ移動するにも標識等が判り難い場合もあった。初訪問では少し戸惑うであろうか。（宿泊地に関しては、25年度に新たな宿泊施設が増えたとのこと）

⑤に関しては、まず、福岡から市川大門町までの移動距離と時間の問題である。移動に丸一日かかってしまう（予算的問題含）。また、町内の移動に関しても、土地が広いため徒歩での移動は不可能で、公共機関（バス）に関しても皆無である。自ずとタクシーの移動が適しており、やはり予算的な問題が生じるであろう。今回は、町と宿泊ホテルの協力で、移動手段に関しては考慮の必要がなかった。

終わりに

平成 25 年 10 月 12 日～20 日にかけて、市川三郷町では、「第 28 回 国民文化祭やまなし 2013 in 市川三郷町」（美術展「書」）が開催された。本学からの参加は、行事等（本学主催の高等学校揮毫大会準備など）の関係で都合が付かずに見送ったが、この国民文化祭において、書道パフォーマンスの打診を受けていた。もし引き受けていたならば、更に本学の PR にもなったであろう。多少悔やまれる。

しかしながら、我われの市川三郷町訪問により、町側が国民文化祭に向けて碑林公園の活用や「書」を媒介とした活動を模索して、国民文化祭を成功させたことは少なからず事実であり、市川三郷町と九州女子大学において、互いに知的利益の共有ができたと考える。

今後、このような機会を再検討し、より良い現地研修ができるよう考えていきたい。

最後に、久保眞一町長をはじめ、市川三郷町職員の皆様、特に尽力頂いた一瀬浩氏、笠井悟氏、多くの協力者各位に対し、改めて深く感謝の意を表したい。

Utilizing "Ichikawadaimon-chiku Daimonhirintakuhon" in Teaching Materials of Calligraphy and the Promotion of Traditional Artwork Throughout Japan

Masahiko KOKI

Course of Principal Human Sciences, Depart of Human Development,

Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi, 807-8586, Japan

No English abstract